

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

中世に於ける当麻曼荼羅と庶民信仰

中 村 勝 博

奈良時代の南都六宗は勿論、平安時代の真言宗、天台宗に於ても仏教の対象は貴族であつて、一般庶民との間には大きな溝を持ち別世界のもので殆んど無縁のものに等しかつた。尤も行基や空也上人の如く庶民の中に弘通する僧も出たが、彼らとて諸宗研学の傍らの浄土願生者であつた事は庶民への流通の上に大きな障害にこそなれ利益にはならなかつた。仏教が庶民の中に浸透してい

たのは法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗等の開宗を待たねばならない。又庶民信仰を示す遺物としては最近大修理の際奈良の元興寺極楽房に於て発見された多数の板絵、印仏、写経、等塔婆、五輪塔等も最も広く注目されている。

当麻寺は中世以降阿弥陀浄土の様を織成した蓮糸曼荼羅信仰を中心として発展をとげて来た寺である。故に一般庶民の信仰も厚かつたことが充分想像される。果して今時の大修理に際し、内法長押の中や、中二階の床、更に床下から巡礼者の納札、納骨五輪塔、納骨竹筒等が多数発見されたのである。これ等がいずれも当麻曼荼羅の庶民信仰を示す極めて貴重な資料と云わねばならないので、更にこれらを一応整理して考察を加えて見た。

今此処で発見された塔の西国三十三所の巡礼納札、五輪塔、納骨等について触れ、更には良鎮の名帳供養、及び今尚毎年行われている練供養に付き述べることにする。

(一) 西国三十三所巡礼納札

那智山、長谷寺、清水寺等の西国三十三所の観音霊所

巡礼することは、既に古く平安時代中頃に始まったと云われ、早くは花山天皇、中世では白河鳥羽、後白河、後鳥羽天皇等を始め、多数の巡礼者があつた。

その巡礼者の中には五番藤井寺から六番壺坂寺へ向う途次、この当麻寺に立寄つて、幕茶羅を拝んだ数も少くなかつたと考えられる。今度の修理にあたり、室町時代中期以降の巡礼者の納札が多数発見されたことは、これを証し又裏付けるものである。實際礼所となつてゐる寺に於ても、中世の巡礼札の実物が残つてゐる所はほとんど無いと云つても良い位であるので、この巡礼札は貴重なものとなるわけである。発見された場所は、北中二階、外陣の内法長押の中、更に床下等で、年代的には室町中期の明応、永正の頃と江戸時代の貞享、元禄の頃に殆んど集中されている。年代の判明しているものを分類すると次の如くである。総数は年代の判明しているもの約二百六十枚、年代記載ないもの、及び不明のものが約二百枚である。

扱てこの巡礼札は享保七年同八年のものを除き、薄い

桧か杉の板に墨書されており、長さは四寸から六寸のものが多く、どの板にも皆打付けた釘跡があるので、もとはどこかへ打ち付けていたことが知られる。又享保七年と八年のものは何れも紙に墨書したものでこれは天井板の割目を塞ぐために張付けたので残つたものである。

永正八年のもので一枚銅板に陰刻したものがあるが、これは西国のみならず東国六十六ヶ所を巡礼したものである。

巡礼者の範囲も遠くは越前、越後、武蔵、土佐、肥前に及んでおり、又記されている名前を見ても姓のないものが多く、百姓等の身分の低いものが大部分で、多くは数人が一団となつて巡礼している。

(二) 納骨五輪塔、納骨竹筒等

現在でも大和地方では故人の霊を弔うため、当麻寺に納骨をするならわしがある。この風習は今に始つたものではなく、既に室町時代から盛に行われていたことは、至徳、天文の銘のあるものを始めとする納骨五輪塔や、簡単なものでは竹の筒に分骨を入れて封をしたもの、更

に納骨ではないが木製小型五輪塔或は等塔婆等も多く発見されていることによつてもわかる。そのうち至徳三年の墨書のある五輪塔は内陣来迎柱の埋木の中から発見され、その他のものは中二階や長押の中から発見されている。

蕨茶羅堂の床下の東石を掘起された際、東石の下から骨片の出て来た所が多かった。これ等の東石は殆んど室町時代中期の長享二年の大修理の際に据えられたままのものと同められたので、東石の下に納骨をしたのもその同時期でなければならぬ。又故人の毛髪を束ね白紙で包んだものも、北中二階から出ている。これ等は何れも故人が西方浄土へ迎えられる様、蕨茶羅堂に納めたものである。更に写経を奉納したものも多少あり、主として厨子の床に納められていた。その他観音経が多く、仏説称讃浄土仏撰受経もあり、又単に南無阿弥陀仏を繰返し写したもの等もある。中には元禄十二年、宝永五年、享保十三年の年号を記したものも含まれている。併し他のものもそう古いものとは思われなかった。

(三) 融通念仏縁起と当麻寺蕨茶羅堂

融通念仏縁起を見ると良鎮が勧進して融通念仏の絵百余本を造り、全国に配布して上下貴族をとわず、広く人々にすすめて名帳を造り、当麻寺の瑠璃壇に奉納したことが知られる。ここに云う当麻寺の瑠璃壇とは、蕨茶羅堂の須弥壇のことであるが、須弥壇の下へ収めることは考えられない。故に厨子の床の中に収められたと思われる。然し実際には厨子の床には江戸時代の写経の他に名帳のようなものはなかったが、然し今度小屋組の中から発見されている。これは短い断片で前後が切られ、良鎮の名帳であるかどうかの確証はないが、恐らく同種のものと思われる。融通念仏に見る年代は、応永二十一年で、発見された名帳と十年の差があるが、このような結縁は永い年月続けられているであろうから、その程度の差があつても差支えないと思う。

又小屋から多数の仏像の板光背、台座の断片が発見されている。光背は立像用、坐像用等断片を含めて七三枚、

台座は蓮肉一四、板及反花、受花等二五箇あり、光背の中には鮮かな文様の残っているものもかなりある。何れもほぼ平安時代後期のものと認められている。所が仏像の本体はなく、現在寺に祀られている仏像の数も余り多くないので、一体発見光背や台座等を持っていた仏像はどうなつたのであろうか、全く不明である。この光背や台座を小屋組に入れたのは、前記応永三十二年の名帳が台坐の下から発見されたから、それより古い事のないはずである。恐らく室町中期頃であらうと思われるのであるが、このように何故多数の光背台坐が不要となつて廃棄されたかと云うことは今後に残される大きな問題であらう。

(四) 練供養について

毎年五月十四日には、二十五菩薩来迎の様を現わした練供養が行われ、その日は近在は勿論、かなり遠方からも多数の参詣者があり寺院境内は人で埋まる。

この練供養は聖衆来迎練供養会式と呼ばれ、夢茶羅堂から金堂、講堂の間を通つて娑婆堂迄長い橋を掛け、そ

の上を二十五菩薩の面をかぶり、仏の姿となり、衣裳と如来を付けた行列が娑婆堂まで、中将姫を迎えに行き、眼前で実際に来迎の有様を立体的に人々に見せるものである。これはもとは迎講と呼ばれたもので、恵心僧都が始められたものであるが当時当麻寺の曼茶羅に帰依し、二十五菩薩の面と装束を寄進したものと伝えられている。尤も実際に何時創められたかわからないが、室町時代に既に行われていたことは確実な史料がある。又最も関係の深い来迎思想に於ても平安末期或は鎌倉時代に作成された来迎図が数多く現存することは、来迎思想が当時相当盛大な発展をとげていた事を知る事が出来ると共に当麻寺の練供養が遅くとも鎌倉時代から行われていたであらう。